

# 目 次

I	はじめに .....	1
II	提案の内容 .....	1
III	研究の実際	
1	通常の学級における授業支援の実践例 .....	1
	(1) 授業研究の意図	
	(2) 授業展開の工夫	
	(3) 学習形態の工夫	
	(4) 地域の人材活用	
	(5) 指導案	
	(6) 授業の考察	
2	全校的な支援体制を構築するための啓発の在り方 .....	7
	(1) 教職員に向けて	
	① 研修会による啓発	
	② 資料による啓発	
	(2) 保護者・児童生徒へ向けて	
	① 集会による啓発	
	② お便りによる啓発	
IV	今後に向けて .....	22

## インクルーシブ教育推進に向けた全校的な特別支援教育への取組 ～合理的配慮を意識した授業実践と啓発の在り方～

提案者 栃木市立赤麻小学校教諭 市村 典子  
真岡市立久下田小学校教諭 柳澤 守人

### I はじめに

特別支援教育において、平成19年度からインクルーシブ教育の推進と合理的配慮の導入が進められている。小中の教育現場では、交流学习が各校で行われているが、思うような成果が上がっていない現状がある。原因として、発達障害の理解不足や適切な支援が行われていないこと、環境が十分に整備されていないこと等が考えられる。そこで、障害のある児童生徒も含むすべての児童生徒に対して、一人一人の教育的ニーズにあった適切な教育的支援を行うために、教員・保護者・児童生徒などに「発達障害の理解と適切な支援」の啓発を行う必要がある。

本部会では、通常の学級における授業支援の実践例と支援体制を構築するための啓発の事例を提案することで、今後のインクルーシブ教育体制の構築に向けて役立てていただきたいと考えている。

### II 提案の内容

- 1 通常の学級における授業支援の実践例
- 2 全校的な支援体制を構築するための啓発の在り方

### III 研究の実際

- 1 通常の学級における授業支援の実践例

#### (1) 授業研究の意図

通常学級には様々な児童生徒が混在しているが、近年いわゆるパステルゾーン（グレーゾーン）と呼ばれる児童生徒が増えてきている。これらの児童生徒は一度にたくさんの指示をされると聞き取れなかったり、見通しが持てなかったりで不安感を持ってしまうという傾向が見られる。そのため、授業を行う教員はどの子にも分かりやすい授業を行おうと努力している。一方、特別支援学級では一人一人の実態から個々のめあてを立てて子供の学びを深めている。しかしながら、通常学級では一つのめあてに向かって全員が取り組まなくてはならない。そこで、どの教科においても「見通し」「視覚化」「焦点化」「共有化」というユニバーサルデザインの視点を取り入れることによって、どの児童生徒にもより分かりやすく達成感のある授業を展開することにつながり、児童生徒の「やってみたい」という気持ちを喚起することができるのではないかと考え、この授業を設定した。

## (2) 授業展開の工夫

本授業では、子供たちに見通しを持たせ、視覚化・焦点化・共有化を意識して授業を展開して行けるように工夫した。また、子供たちは友達との協働作業によって、お互いに寄り添いながら進められるようにした。展開のそれぞれの段階においての具体的な取組を次のように工夫してみた。

- ①導入時 見通しを持たせることで子供の不安感をなくす工夫  
やり方を視覚化し、明示することで授業に引きつける工夫  
→ 本時の学習への意欲を高め、引きつける。
- ②展 開 2人組で同じペースで進めさせることで安心感を持たせる工夫  
共有化、視覚化により進捗を確認しながら進める工夫  
DVDを用意したり、実物見本を用意したりすることで確認しながら活動する工夫  
→ このことが安心感につながる。
- ③終 末 「わかった」「できた」ことを友達と共有化する工夫  
→ 次時への意欲付けにつながる。

以上の点を意識しながら指導案作成に当たった。

## (3) 学習形態の工夫

本授業は、ペアを作り教え合いながら作品作りを進めていくスタイルで学習を進めた。二人がアドバイスをし合い、理解の共有を図りながら、同じペースで作業を進めていくことは安心感につながる。また何をやるか確認でき、相手に教えることが自分に自信を持つことにつながる。



## (4) 地域の人材活用

本校では、学校全体としてボランティアの活用が盛んである。栃木市には「とちぎ未来アシストネット」という組織があり、学校や教員が求めている地域の人材が数多く登録されている。学校コーディネーターや地域コーディネーターを窓口にして、下記のような多方面にわたるボランティアが活用できるようになっている。

(例)のこぎりの使い方、さつま苗植え、浴衣着付け、読み聞かせ、琴、かけ算、書道、そろばん、笙、伝統文化、お囃子、茶道、ミシン、手縫い 等

本授業での家庭科ボランティアには、布に正しく印が付けられているか確認をしてもらった。事前に打ち合わせを行い、以下のようなことをお願いし、子供たちのモチベーションを上げて授業に取り組めるようにした。

- ① 見守ってもらうこと
- ② アドバイスをしてもらうこと
- ③ 「よくできた」「がんばった」の励まし言葉を掛けてもらうこと



## (5) 指導案

(栃木県小学校教育研究会下都賀支部研究会 特別支援教育部会での授業より)

\*\*\*\*\*

### 家庭科学習指導案

平成28年10月21日(金) 第5校時

第6学年1組 授業者T1 吉成 智代

T2 市村 典子

## 1 題材名 思いを形に生活に役立つ布製品

## 2 題材の目標

- (1) 大きさや形、使う目的を考えた、自分の生活に役立つ布製品に関心を持ち、家族との生活に生かそうとする。 【家庭生活への関心・意欲・態度】
- (2) 使う目的に応じて、製作する物や製作計画について考えたり、自分なりに工夫したりする。 【生活を創意工夫する能力】
- (3) 用具を安全に取り扱い、手縫い、ミシン縫いを活用して製作することができる。 【生活の技能】
- (4) 製作に必要な材料や用具の安全な取扱い方が分かり、製作手順について理解する。 【家庭生活についての知識・理解】

## 3 題材設定の理由

- (1) 児童の実態(男子17名 女子17名 計34名)

本学級の児童は、落ち着いて授業に取り組むことができ、製作活動に対しても意欲的である。しかし、5年生でのエプロン製作では、「早く作りたい」という思いから、作業は早いけど丁寧さに欠ける児童や、まだやらなくてよい作業に先に進んでしまう児童もいた。また、知識、技能の個人差や、見え方に困難を抱えていて支援が必要な児童もいる。

そこで、これらの実態やエプロン製作時の反省を踏まえ、製作手順を視覚化して提示することで学習内容を理解しやすくしたり、個別の言葉掛けを多くしたり、作業がやりやすくなるような物を用意したりして、最後まで意欲的に取り組めるようにしていきたい。

- (2) 特に配慮を要する児童について

**A児：**先天性眼振があり、文字を見ることがや細かい作業をすることが困難である。普段は拡大教科書を使用し、特に縦書きの文章を読むのが難しい。5年生のエプロン製作では、待ち針打ちやミシン縫いにかかなりの時間を費やしたが、作業に根気よく取り組み、仕上げることができた。ものさしの印を見やすくしたり、拡大版のワークシートを用意したり、A児の目の前で実際に作業をやって見せたりして、分かりやすい支援を行いたい。

**B児：**課題や作業への取りかかりに時間がかかり、やるべきことが時間内に終わらないことも多い。5年時のエプロン製作では、製作の進捗がかなり遅れてしまった。そこで、何をする時間なのかを意識させたり、ペアで製作の進捗を確認する時間を作ったり、声掛けを多くしたりして、集中して取り組めるようにしたい。

**C児：**特別支援学級（知的）に在籍し、音楽・図工・体育・家庭科を交流学級で行う。何事にも自信がなく、声を掛けられても返事をする事ができない。交流学級で言葉を発することは極端に少なく、困っていても自分から助けを求める事ができない。日頃から実技は事前に特別支援学級で学習し、自信を持って授業に参加できるように支援している。

**D児：**言葉での指示は入りにくい。多くの指示で作業や活動に取り組むことに不安を持ち、落ち着きに欠けたり、分からないことがあると作業に取り組むのに時間がかかったりしてしまう。そこで、少しでも不安を取り除くために、本児には、全体指導の後、個別に短く数も少なく指示したり、視覚化したりし、落ち着いて作業に入れるように支援していきたい。また、よくできたことを称賛することで、自己肯定感も高まるようにしたい。

(3) 題材について

本題材は、学習指導要領『C 快適な衣服と住まい 領域』

**C 快適な衣服と住まい**

(3) 生活に役立つ物の製作について、次の事項を指導する。

- ア 布を用いて製作する物を考え、形などを工夫し、製作計画を立てること。
- イ 手縫いや、ミシンを用いた直線縫いにより目的に応じた縫い方を考えて製作し、活用できること。
- ウ 製作に必要な用具の安全な取扱いができること。

を主要なねらいとして、構成している。

児童は5年生において、「手縫い」や「ミシン縫い」の基礎的・基本的な技能と、使う用具の安全な使い方を学習してきた。6年生では、それらの学習を生かし工夫して生活に役立つ布製品を製作することを通して、技能の向上だけでなく、家族との関わりを深めたり布製品を選ぶ視点を養ったりすることをねらいとしている。

本題材では、製作する物は、一人一人の「こんな物を作りたい」という思いを大切に、実際の生活に役立つ布製品を作るようにさせたい。しかし、一斉に様々な物を製作すると、進捗に差がついたり、指導が困難になったりすることも予想される。そこで、保護者や学校支援ボランティアの方に指導支援者として参加していただいたり、毎時間製作過程を確認してから製作に入らせたり、同じ種類の物を製作している友達とペアを作りアドバイスし合うようにしたりすることにより、進捗差をなくし、製作意欲が持続するようにさせたい。

#### 4 指導計画（総時数15時間）

- (1) 目的に合った形や大きさとぬい方を考えよう …… 1 時間
- (2) 工夫して作ろう  
製作計画を立てよう …… 1 時間  
自分が選んだ布製品を工夫して作ろう …… 11時間（本時 3 / 15）
- (3) 衣生活を豊かにしていこう …… 2 時間

#### 5 本時の指導（3 / 15時間）

- (1) 小題材名 自分が選んだ布製品を工夫して作ろう
- (2) 本時の目標
  - ・用具を正しく取り扱い、しるしを付けることができる。
- (3) 授業の観点
  - ・ペアを作り教え合いながら製作させたことは、進度差をなくし、製作意欲を持続させることに有効であったか。
  - ・ボランティアの学習支援活動は、個別指導が必要な児童に有効であったか。
- (4) 展 開 ㊦見通し ㊧視覚化 ㊨焦点化 ㊩共有化 ☆人権教育の視点

主な学習活動	時間	教師の支援・評価	特に配慮を要する児童への支援
1 前時までの学習を振り返る。	2	㊦製作の大まかな流れを提示し、見通しを持たせる。	
2 本時のめあてを確認する。	3	㊦製作計画表の中のしるし付けを行うことを知らせる。 ㊧実物見本を提示する。 ・製作する物によって、しるしの付け方が異なることを確認させる。 ㊦㊨基本のしるしの付け方を確認する。 ①ものさしの端を使って、出来上がり線のしるしを付ける。 ②角は十字にしるしを付ける。 ・やり方が分からないときは、ボランティアの方に教えてもらってよいことを伝える。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">           用具を正しく使って、しるしを付けよう。         </div>			
3 用具を正しく使って、しるしを付ける。	35	㊦本時の活動の流れは黒板に示し、見通しを持たせたい。	A：拡大版の製作計画書を用意する。



主な学習活動	時間	教師の支援・評価	特に配慮を要する児童への支援
(1)製作の手順を確認する。 (2)チャコえんぴつでしるしを付ける。 ・しるしが正しく付いているか、友達と確認し合う。 (3)しるしの付け方が合っているか、ボランティアの方に確認していただく。 (4)用具の片付けをする。  4 学習の振り返りをする。	5	㊦㊧教材セットに入っている作り方の拡大版を掲示しながら、しるし付けのやり方が書いてあるところと一緒に確認する。 ㊧同じ種類の物を作っている人同士でペアを作り、一人ずつ、一緒に確認しながら作業させる。 ㊦㊧ペアに1枚、本時の活動の流れのシートを持たせ、進捗を確認させる。  ㊦しるしの付け方のDVDを用意し、いつでも確認できるようにしておく。 ☆友達の作業を最後まで見届け、教え合いながらしるしを付けさせる。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 用具を正しく取り扱い、しるしを付けることができる。  <b>【技】</b>（行動観察、作品） </div> ㊦製作の大まかな流れを提示し、次時の見通しを持たせる。	B：一緒に計画表を確認して作業の見通しを持たせ、製作意欲を高める。(T2) A：手元に拡大版のヒントカードを持たせる。 A：色テープを貼ったものさしを用意し、長さを測りやすくする。 AD：ものさしの使い方をやって見せ、正しく使えるようにさせる。(A:T1、D:T2) B：常に進み具合を確認し、声掛けを多くする。(T2) C：事前に特別支援学級でしるしを付ける場所を確認し、自信を持って作業に取り組めるようにさせる。(T2) D：しるしを付ける場所と一緒に確認し、安心して製作できるようにする。(T2) D：丁寧に作業ができたときは認め、称賛する。(T2)

\*\*\*\*\*

## (6) 授業の考察

通常学級の児童も特別に支援を要する児童も限られた時間の中で目標に近づけさせるために、意欲を持続させ活動させる工夫を行った。「苦手だな。」「難しそうだな。」というようなことに対しても頑張ろうとする気持ちを持たせるために、授業で「何をどこまで学ぶか」を明確にしてやるとうまく流すことができた。

通常学級における支援の目標は「自信をつけさせる」ことであり、担任が指導案に「㊦見通し ㊦視覚化 ㊦焦点化 ㊦共有化」と明記することによりユニバーサルデザインを意識した授業を行うことができた。

教材セットの説明書だけでなく、実物見本、DVDなどによる確認が安心感につながった。また、ペア学習することで安心して活動に取り組むことができ、相手に教えることで自信につながっていった。たくさんの情報やいろいろな指示の中から常にペアで確認することができるため「これでいい。」と互いに安心することができた。

最終的に自分で乗り切る力を付けさせなければいけないが、教師やボランティアが適切に声掛けすることにより安心感を持つことができた。見守ってもらえることの安心感はその学習の得意な児童、苦手な児童、共に有効であった。しかし、得意な子に対して、より高度な課題に挑戦した達成感を味わわせる授業が必要であることは課題である。

## 2 全校的な支援体制を構築するための啓発の在り方

### (1) 教職員に向けて

#### ① 研修会による啓発（パワーポイントのスライドによる説明）

##### ア A校における校内研修

#### 〔発達障害の種類や特性〕

<p>説明できますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・広汎性発達障害</li> <li>・AD/HD</li> <li>・LD</li> <li>・アスペルガー症候群</li> <li>・高機能自閉症</li> <li>・自閉症</li> </ul>	<p>特別な教育的支援を必要とする児童生徒 (2012)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学習面または行動面で著しい困難を示す 6.5%</li> <li>○学習面で著しい困難を示す LD 4.5%</li> <li>○行動面で著しい困難を示す ADHD, ASD 3.6%</li> <li>○学習面と行動面ともに著しい困難を示す 1.6%</li> </ul>	<p>非定型発達特性から見た発達障害の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○発達全般の <ul style="list-style-type: none"> <li>・遅れ: 知的障害(精神遅滞)</li> <li>・ゆがみ: 自閉症スペクトラム障害</li> </ul> </li> <li>○発達のある側面の遅れ・偏り・ゆがみ <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習障害</li> <li>・コミュニケーション障害</li> <li>・運動機能障害</li> <li>・行動制御の遅れ・偏り <ul style="list-style-type: none"> <li>・ADHD(注意欠陥多動性障害)</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>
--	--	---

#### 〔発達障害の特性に合わせた配慮〕

<p>ことばへの配慮が重要</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 省略しない完全な文章で話す <ul style="list-style-type: none"> <li>・主語と目的語をつける</li> <li>・具体的な用語・表現を用いる</li> <li>・冗談は控える・皮肉は言わない</li> </ul> </li> <li>2 代名詞は指示する名詞をつけて使う <ul style="list-style-type: none"> <li>・「それ」ではなく「そのコップ」</li> <li>・「この前」ではなく「先週の水曜日、5月2日」</li> </ul> </li> <li>3 肯定的表現・用語を話す <ul style="list-style-type: none"> <li>・否定的表現は使わない: だめ、違う、変だ、おかしいなど</li> <li>・「間違っている」ではなく「〇〇をこんな風に見たら」</li> </ul> </li> </ol>	<p>多動性・衝動性に対する配慮</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 多動 <ul style="list-style-type: none"> <li>○活発エネルギーの発散 <ul style="list-style-type: none"> <li>・作業や学習の前の運動など</li> </ul> </li> <li>○「合法的」に動かす <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが動く前に動くことを指示など</li> <li>・用事を頼む～お礼を言われる、ほめられる</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>2 衝動的行動 <ul style="list-style-type: none"> <li>○相手の希望聴取と具体的な行動指示 <ul style="list-style-type: none"> <li>・理由は尋ねない</li> <li>・どうしたかったのかを尋ねる「何をしようとしたの」</li> <li>・許容される代替行動(適切な行動)を教える</li> </ul> </li> </ul> </li> </ol>	<p>心理面の支援</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 情緒の安定化 <ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的な情緒の場の設定: 黙って聞いてあげる</li> <li>・共感・共感的理解「イライラして大声だったのかな」</li> <li>・常識の提示「大声出さなくてすむといいよね」</li> <li>・よいことばかけ(positive stroke)</li> <li>・「ありがとう」の言葉かけ～利他的行動に対して</li> <li>・自己理解の促進: 自分の特性に対して</li> </ul> </li> <li>2 自信の回復 <ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な課題選択</li> <li>・一から始めて十で終わる話し方</li> <li>・ほめること</li> </ul> </li> </ol>
---	---	---

#### 〔児童生徒の実態に合わせた支援方法〕

<p>演習1</p> <p>40人学級で大きな声で 「みなさん、こっちを向きなさい」と指示して、 こっちを向けないAさんがいます。 どんな要因が考えられますか？</p>	<p>演習2</p> <p>ADHDのBくんは整理整頓が苦手です。 机の周りにはいろんな物が散らかっています。 教室でどんな指導をしますか。 担任はBくんのかごを用意したいと考えています。</p>
--	--

##### イ B校における校内研修

#### ・発達障害の理解について

#### 〔個々の障害特性〕

<p>ケース① 授業に集中できない</p>	<p>色々あるけれど・・・</p> <p>○認知の統合がうまくいかない 例えば... →食べて味わうこと + お母さんの言葉を聞くこと →殴られて痛い + 相手を殴ったら相手も痛い ≒不器用さ</p> <p>【対応】 統合機能をトレーニングする (例: 赤上げて・白上げて、お手玉、縄跳びetc.)</p>	<p>演習</p> <p>子どもがチャーハンを食べていました。 母親がその子どもに 「チャーハンどう？美味しい？」と聞くと、 突然その子どもは母親を殴りました。 さあ、どうしてでしょう？</p>
-----------------------	---	---



ウ C校における計画的な現職教育

- LD理解へ焦点化した物

〔LD児の文章の読み誤りの体験〕

めあ こね こと  
いのなかでこきものはどわ？

#### 1、LD(学習障害)

次の文章を  
「あ」と「め」「い」と「こ」  
「ね」と「ぬ」「れ」と「わ」  
を置き換えて、読んでください。

- めあ こね こと
- いのなかでこきものはどわ？

正解は...「こね(いぬ)」。

めあ こね こと  
(あめ) (いぬ) (いと)

いのなかで こきものは どわ？  
(こ) (い) (れ)

## ② 資料による啓発

ア 児童生徒の行動特性を理解してもらうための資料

〔困難さを抱える児童生徒に見られる主な行動特性〕

こんな子いるかな？

特に知的の遅れはないのに、どうしてこんなことがわからないのかな？  
あれはできるのに、どうしてこれができないんだろう？  
この落ち着きのなさは性格なのかな？  
他の子たちとはどこか違う、何か変だな？

一生懸命本を読むんだけど、同じ行を  
読んだり、とぼしたりする

1対1で話すとよくわかるのに集団の  
中ではどうも理解が悪い  
一人指示と違う行動をとってしまう

とにかく気が散りやすい  
すぐに他の事へ注意が向く

とにかく落ち着きがない  
すぐに席を離れてしまう

体の動きがぎこちない  
すごく不器用

図工など、熱中するといつまでもや  
っている  
別の行動に移れない

部分だけをみてしまう  
全体をうまくとらえきれない

注目すべき事と違うことや逆のこ  
とに注意を向けている

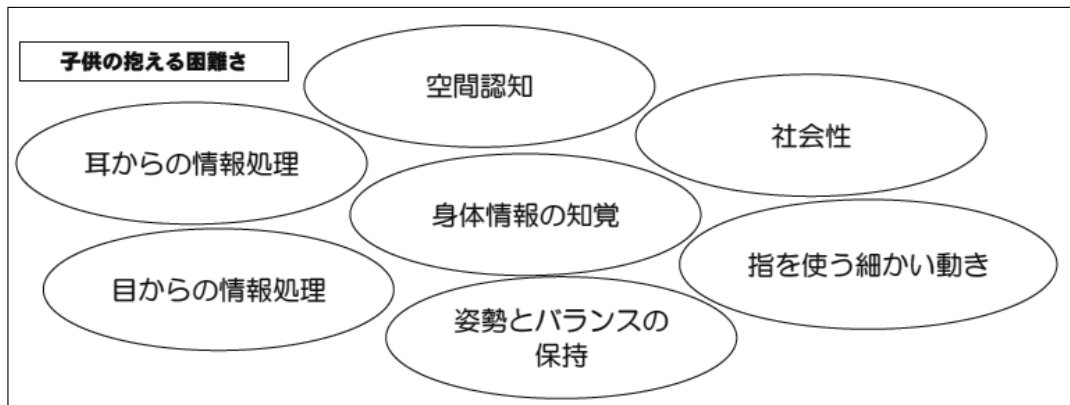
いらいらしていることが多い  
喜怒哀楽が激しい

筆算のケタがずれやすい

〔動作や感覚の困難さの具体例〕

- (1) 動き
- ・ボール運動や縄跳び、鉄棒が苦手。
  - ・バランスが悪く転びやすい。
  - ・きちんと座って居られず、姿勢が崩れやすい。
  - ・とても疲れやすい。
  - ・同じ姿勢を保つことが難しく、絶えず体を動かしている。
  - ・手先を使う動作が苦手（はさみの使用、紐結び、箸の操作等）。
  - ・絵を描くのが苦手。文字が乱雑になりがち。
  - ・ボールをキャッチするのが苦手。
  - ・楽器の演奏が苦手。
- (2) 感覚
- ・食べ物の好き嫌いが多い。
  - ・何でも口に入れる。
  - ・抱っこ、歯磨き、爪切りが嫌い。
  - ・靴下や靴が嫌い。
  - ・服の裾をズボンの中に入れるのが嫌い。
  - ・我慢できない音やにおいがある。

〔主な障害特性〕



イ 障害を持つ児童生徒への支援に対する心構えの資料

〔支援に対する基本的な考え方〕

時間をかけて努力し、少しずつ上達しても、周りの人はいとも簡単に、もっと上達してしまいます。(プロ野球の選手の中で、一人練習している草野球の選手のように。)



**他人と比べるのではなく、自分の力でできる課題を設定することが大切です。**



**生き生きと体を動かし始めます。**

**対 応**

- ① 子供の困難さを理解する。
- ② 「みんなと同じ」ことをめざすのではなく、その子なりの伸びを助ける。
- ③ その子が楽になる環境を整える。

<p><b>1 指導内容のsmallステップ化</b> 指導内容を細分化し、いくつかのステップに分けて、順に提示する。</p> <p><b>2 教材の具体化を図る</b> 抽象性の高い内容は、必要に応じて、具体的な教材で補う。</p> <p><b>3 学習の速さの配慮する</b> 他の子どもより、ゆっくり丁寧に指導する。</p> <p><b>4 繰り返し指導する</b> 基礎的・基本的事項の理解の定着が図られるよう、繰り返し指導する。</p> <p><b>5 フィードバックする</b> 学習の経過や成果を、本人に分かりやすく伝える。</p>
---

## ウ 授業作りと環境整備の資料

〔一斉授業における授業作り〕

<p><b>2 授業づくり</b></p> <p><b>(1) 考え方</b></p> <p>① 「個別支援」と「授業づくり」の両輪で</p> <p>② 「授業づくり」は「構造化」と共同的な学習の両輪で → 分かりやすい授業</p> <p>③ 「授業づくり」の実践は、「授業の公開」から → 校内で互いに授業を見せ合う</p> <p>《 キーワードは「承認」 》</p> <p>人の話を聞く → 相手の存在を承認する 人に話す → 相手に承認を求める</p> <p>《 聴く作法の徹底 》</p> <p>① 相手に体を向けて聴く</p> <p>② 相手の話を分かろうとして聴く</p> <p>③ 相手の話に反応しながら聴く</p> <p>♥ 「聴かない」ことは、相手を最も傷つける。</p> <p><b>(2) 授業づくりのヒント</b></p> <p>「学びあい」＝ 「聴き合い」</p> <p>① グループ発表のとき、言葉がつまってしまう × 「代わりに言ってくれる人」・・・発表した子が傷つく ○ 「続きを言ってくれる人」・・・発表した子が生かせる 聞いていなければ続きは言えない</p> <p>② 言いよどんでいるときに、「〇〇ってこと？」と、言葉を補ってもらうことで、言葉は育っていく。</p> <p>③ 相手と話し合いながら、自分の考えがまとまってくる。</p> <p>④ 「自分の考え」は、言葉を紡ぐことによってしか、生成されない。</p> <p>④ 言葉を語りながら、物事を考えている。しかも、それは、流暢におしゃべりしているときではなく、とつとつと語られているときである。 → 教師は、しゃべりすぎたはいけない</p>
--

### 特別支援教育における 教室での個別支援 (T. T)

- 1 特定の児童の側に、常にいることは避ける。  
“Aさんの側にはいつも先生がいる。”そんな状態が続くと・・・
  - ① Aさんに対して周りの児童が偏見を持ったり、Aさん自身のプライドが傷ついた  
りする場合がある。
  - ② Aさん自身の依頼心が強くなり、自分でできることも頼ろうとすることがある。
  - ③ 周りの児童の中に、自分も先生に頼ろうとする児童が出てくる場合がある。

↓

☆ Aさんを視界の中に捉えながら、さりげなく他の児童の支援もする。
- 2 できないことをフォローするだけでなく、できていることを見つけ、支援が自信につ  
ながるように、配慮する。(Aさんも、他の児童も)  
【 例 】
  - ① 授業の妨げにならないように、個人作業のときに、「先生を見て話を聞いている  
ね。」「字がていねいだね。」「背中がすうっとのびてるね。」等と、ささやく  
ように声をかける。
  - ② 大きな声であいさつをしている児童に、「元気な声で気持ちがいいね。」と声を  
かける。

## 教室の構造化

次のことに気を付けて教室を構造化することで、子どもたちの授業の姿勢が変わります。

#### ①教師の机は整理整頓しておく

教師の机は前にあるため、授業中目につきやすい。授業と関係のない教材やテストの答案などが積み上げられていると、子どもの気が散りやすくなる

#### ②棚やロッカーも目につきにくくする

水槽や植木鉢などがたんすの上に置かれていると視界に入ったとき注意が向きやすくなるため、ものはできるだけ減らす。棚の中が見える場合は、目隠しのカーテンなどをつける

#### ③前列中央の席がよい

黒板に集中しやすく、先生の立つ位置にも近い  
ため、個別に指示が出しやすい。窓や出入り口からも離れているため、外の刺激が届きにくい。

#### ④前面の壁の掲示物は必要最小限にとどめる

教室の壁のうち、特に黒板周りの壁面にはあまり掲示をしないようにする。時間割やクラス  
の目標などは最小限にとどめ、不要な刺激を減らす



(2) 保護者・児童生徒へ向けて

① 集会による啓発

〔保護者会での啓発資料：めがねを例にして〕

## 特別支援教育について

「〇〇めがねがあつたらいいのにな。」

めがねをかけている人に、「めがねをかけているのは、みんなと同じじゃないから不公平だ。」と言ったら、周りの人はどういう反応を示すでしょう。

「おかしいことを言う人ね。めがねをかけないと、よく見えないじゃないの。」と言われてしまいますよね。



めがねは見えにくいものをよく見えるようにし、快適に暮らせるようにするための道具です。もし、漢字がよく読める『漢字めがね』、作文が書きやすくなる『作文めがね』、かけると気持ちが落ち替く『落ち替くめがね』・・・など自分にぴったりのめがねがあつたらどうでしょうか。

### 苦手なこと、困難を感じることで誰でもありますね

人には、生まれ持った才能や特質、成長の過程で身に付けた能力など、一人ひとり違ったものをもっています。とても得意なことがある反面、とても苦手なことがあったりします。

苦手さも、少し努力すればできるようになる程度のものから、どんなに努力しても難しいものまで人によって違いがあります。

ものの見え方、聞こえ方、状況判断のしかた、気持ちのコントロールのしかた、人の表情の読み方・・・などなど、努力不足やふざけではなく、本人もどうにかしたいと思ってもどうしてよいかわからず、叱られることが多くなり、自分で自分の評価を下げてしまっていることも多いでしょう。

本当に困っているのはまわりの大人よりも、その子自身なのです。

### その子にあった「めがね」をみつけよう

～『自分の力を高めよう』とする児童を応援します～

② お便りによる啓発

ア 特別支援教育への理解を深める資料

〔特別支援教育とは何か〕

### 特別支援教育って？

平成 19 年 4 月、「特殊教育」から「特別支援教育」へと名称が変わり、その考え方も大きく変わりました。学校教育法には、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等では『特別な支援の必要な子どもに対して、適切な支援を行うもの』と明記されています。特別支援学級だけでなく、通常学級でも特別支援教育は行われることとなりました。

特別支援教育は一人一人を大切に作る教育です。通常学級では、『安心感』『わかりやすさ』をキーポイントに、一人一人が本来持っている力を最大限発揮できるように、あたたかくきめ細やかな指導を行っていくことを目指しています。



【特別支援を受けられる体制】

- ◇学級担任やティームティーチングによる通常学級での個別の支援
- ◇チャレンジ学級、ひまわり学級での少人数指導
- ◇通級指導教室「ことばの教室」での自立活動中心の個別指導や教育相談
- ◇スクールカウンセラーや外部の専門家チームの巡回相談



【〇〇〇〇小学校の特別支援教育】

- ①一学期中に、すべての児童を対象として、学校生活全般の中で、困難さを抱えている児童はいないか、担任を中心に把握します。
- ②保護者の方からの情報を得ながら、学校生活のあらゆる場面で必要な教育的支援を行います。
- ③特に困難さを抱えている児童に対しては、保護者の方の了解を得た上で、個別の指導計画を作成し、指導・支援を行います。



【特別支援が必要な児童とは・・・】

話す・聞く

- 聞き違いや聞き漏らしが多い
- 一斉の指示が理解しにくい。
- 自分の思いを伝えられない。

計算する・推論する

- 立体図形の問題が苦手
- 計算に時間がかかる ミスが多い
- 位取りが混乱する

生活する

- 忘れ物が多い
- 片付けができない
- 準備ができない

読む・書く

- 文字が覚えられない
- 行を飛ばして読む
- 形の似た平仮名を書き間違える

運動・動作する

- 動きがぎこちない
- なわとび、ボールをうまく使えない
- はさみやコンパスが苦手

行動する

- 落ち着かない 立ち歩く
- こだわりが強い
- すぐかっとなる

【保護者の方と共に考えていきます】

児童にとって、どの体制で教育を受けることが一番なのかを考えます。そして、家庭と同じ歩調で連携して支援していきます。そのために、生育暦を伺ったり、支援の方向性を見極めるために個別の発達検査を実施したりすることもあります。

【支援内容の引き継ぎ】

個別の指導計画の内容については、児童に関わるすべての職員で支援の方法を共有したり、次の年度への引き継ぎを行ったりすることで、より支援の効果が上がります。

保護者の方と担任とで支援の内容を確認し、支援の方法についてさらによい方法はないか話し合い、適切な支援を行うように努力していきます。

☆自立活動（<sup>じりつ</sup>自立）

自立を目指し、その児童が生活上、苦手としていることを改善・克服するための学習です。健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーションの力を伸ばします。

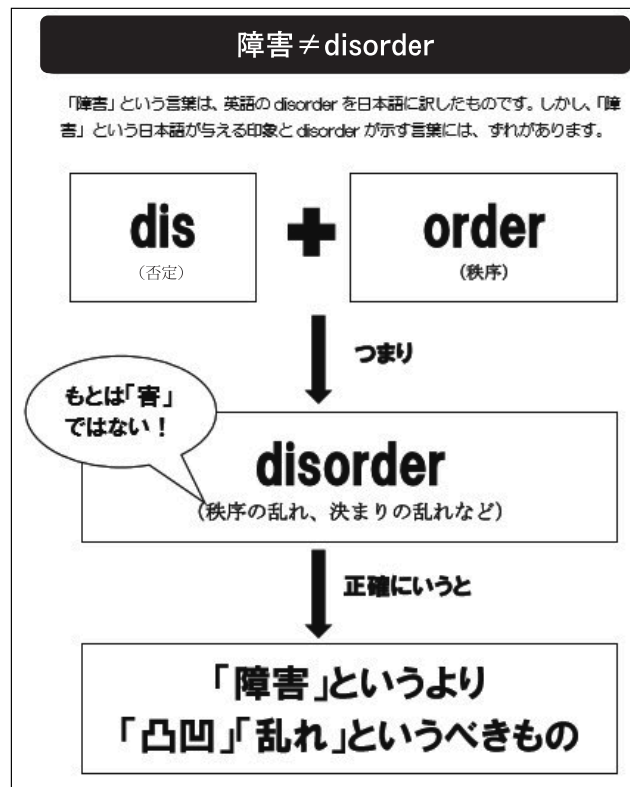
☆日常生活の指導（<sup>にっせい</sup>日生）

学校生活を含め、日常生活を送る上で必要な事柄（例えば、衣服の着脱・排泄・食事・清潔の基本的な生活習慣に関すること（あいさつ・返事・決まり・役割等の社会生活に関することなど）を、実際の生活の流れの中で学習します。

☆生活単元学習（<sup>せいたん</sup>生単）

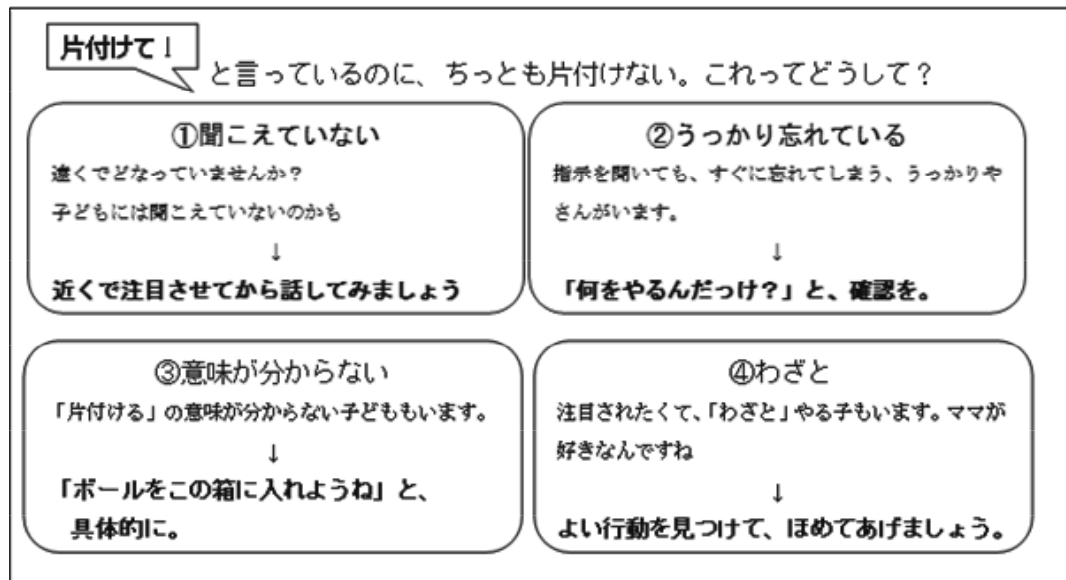
生活に基づいた目標や課題をやり遂げるために様々な活動に取り組みます。今年度は、「歩いて行こう」「体力をつけよう」「宿泊学習に行こう」「スポーツ大会に参加しよう」等の学習を通して、社会に出て自立するための力を身に付けます。児童によっては、進学などを目標に国語、算数、理科、社会などの補習を行うこともあります。

〔障がいは「害」ではない〕



イ 子供への接し方についての資料

〔片付けてもらいたいときにどうするか〕



### 子どもがウソをつくとき

子どもはウソをつくことがあります。  
それは、本当のことを言うと怒られるときです。

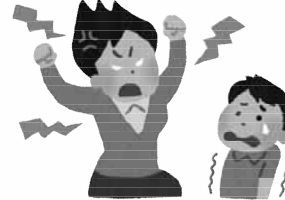
子どもはそれまでに、本当のことを言えば怒られ、ウソを言えば怒られなかった体験を積んでいるのです。

たとえば、何かをなくして「なくした」と本当のことを言えば怒られたけど、「知らない」と言えば怒られなかった等の経験を多くしているのです。

「ウソを言ってもだめ」と言われても、そこで本当のことを言ったら、また怒られると思い、なかなか本当のことを言ってくれないことが多いものです。

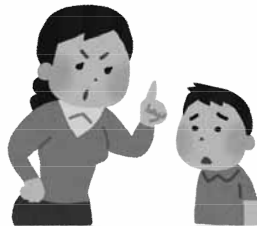
本当のことを  
言わないと怒るよ。

ウソをついてもダメ！  
本当のことを言いなさい！



### では、どうすれば？

本当のことを言ったら  
絶対に怒らないよ。  
でも、ウソを言ったら怒るからね。



子どもはとにかく怒られるのが嫌なのです。  
本当のことを言うと怒られそうなとき、本当のことを言ったら怒られず、ウソをついたら怒られると、「本当のことを言えば怒られないんだ」ということを学びます。

一番大切なのは、本当のことを言えたら、本当に怒らないことです。「怒られるかもしれないのに、よく本当のことを言えたね。」と言葉をかけます。

そこで怒ってしまったら、「やっぱり怒られた。本当のことなんて言うんじゃないかった。」となってしまう。

まず、本当のことを言えたことをほめ、それから間違いや失敗をさりと注意します。

何度言っても忘れ物をする子どもにイライラする・・・

そんなときどんな言葉かけをしますか？



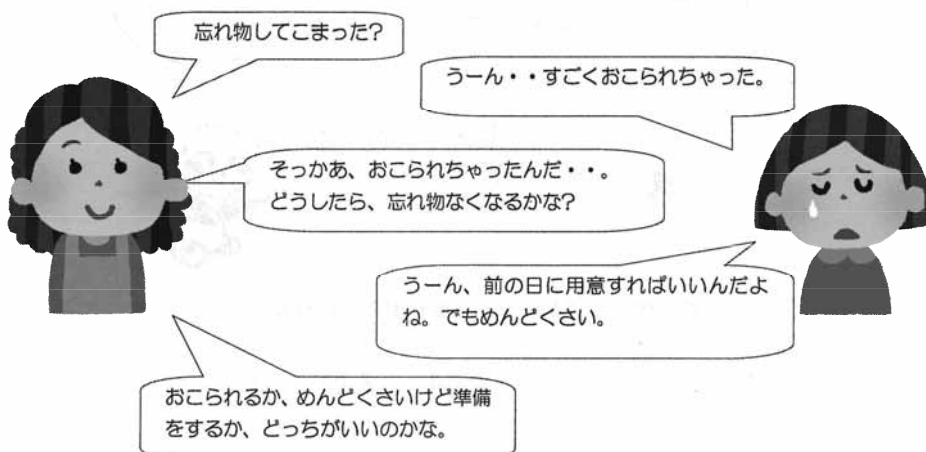
どうして、いつも忘れ物するの！  
そんなことだから、何をやってもだめなのよ！  
こんな簡単なこともできないなんて、いったい  
何 考えてるの！

言われた子どもは・・・



- ・忘れ物くらいでそこまで言われたくないわ
- ・いつも責められて嫌になる・・・
- ・見捨てられちゃった・・・
- ・私ってダメな子なんだ

ちょっとした一言から喧嘩になることはないですか？ まず共感を示すと会話のパターンが変わります。相手の気持ちを評価せず、そのままくり返すことで、同意できなくても「共感を示す」ことができます。



「なぜできないの？」という言葉でなく「どうしたらできるかな」と自分で考えられるような言葉かけにしてはどうでしょう。無理してやらせようとせず、選択肢を示すだけで効果的なこともあります。



子どもにとっては、その人といっしょにいれば「大丈夫」と思える大人の存在が必要です。一緒だからこそ新しい挑戦や大胆な冒険ができるような大人。新しい挑戦ができなければ、子どもは自分の世界を広げることができません。

子どもが不安になっているときには、大人は子どもの体を抱きながら、「大丈夫だよ。大丈夫。」と言いましょう。説明などいりません。このときの「大丈夫」は、疑問形ではだめです。「大丈夫?」「大丈夫?」と子どもに問えば、逆に子どもの不安を高めてしまいます。「大丈夫。」と言い切るように語りかけることによって、子どもに安心感を与えます。

**「大丈夫」の言葉は、「私がいるから大丈夫だよ。」というメッセージを子どもに伝えてくれます。その言葉を聞きながら、子どもは自分を守ってくれる人の存在を強く感じるはずです。そして安心し、気持ちを落ち着かせていきます。**

子どもがいつか、子どもでなくなったときも、「大丈夫」と言ってくれた人の存在は、心の中にあり続け、きっと安心と勇気を与え続けてくれることでしょう。

かけるとよい言葉～夏休みにふわふわ言葉のシャワーを！～

「もう一度、考えてみよう」  
「ここまでできてるよ」  
「次は何をすればいいかな」  
「どんどんやってみて」  
「よくできたね」  
「分からなかったら言ってね」  
「そばにいるよ」  
「見てるからね」  
「きっとできるよ」  
「がんばったね」  
「困ってたら教えてね」  
「応援してるよ」  
「ゆっくりやろう」  
「がんばってるね」  
「気持ちが分かるよ」  
「すごい」  
「どこまでならできそうかな」  
「ここまでやろうね」  
「大丈夫一緒にやろう」  
「よく考えたね」  
「まちがってもいいよ」



## 伝わりにくい言葉

「言うことを聞かない」のではなく、「分からない」のかもしれませんが。

「何度言っても、言うことを聞かない」と思った時、子どもは大人の言うことを理解していない場合、意外と多いようです。

### 1 指示語が分からない

「それ取って」「これ片付けて」など、つい使ってしまいがちですが、「これ」「それ」「あれ」「どれ」といった、いわゆる「こそあど言葉」は、子どもにとって分かりにくいことがあります。

↳ 「お皿をとって」「ブロックは箱に入れて」など、具体的に言う。  
大人がやって見せながら言う。

### 2 抽象的な言葉が分からない

「部屋を片付けて」「ちゃんとして」これらの言葉も言ってしまうがちですが、抽象的で分かりにくいことがあります。

↳ 「何を、どこに、どうする」まで、具体的に言います。「本を本棚に入れて」「椅子に座って」

### 3 疑問形のしかり方

「なにやってるの」「どうしてそんなことするの」等、しかる言葉は疑問形が多くなります。でも、言われた子どもは怒られていることは分かっても、どうしていいが分からず、キョトンとしています。

↳ 子どもを叱るときには、すべきこと、してほしかったことをストレートに短く、ポンと言うとよく伝わります。

「どこ歩いてるの!」× → 「端を歩きなさい」○  
「何時だと思っているの!」× → 「早く寝なさい」○  
「いつまでやってるの!」× → 「あと〇分でおわりにしなさい。」○

### 4 本当の思いとはギャップがある

大人はよく「勝手にしなさい」と言い、本当に勝手にすると怒るということがあります。これでは「勝手にしなさい」と「勝手にしてはいけない」という相反する二つのメッセージを送ることになり、子どもは混乱したり、不安になったりします。

↳ 本当にしてほしいことを「〇〇してね」とシンプルに伝えます。

## ご家庭でできる、特別支援3つのポイント

### ○肯定的に話を聞く

いやだったんだね。がんばったんだね。やめたんだね。

### ○規則正しい生活

今日も早起きできたね

### ○お手伝い

〇〇くんがいないと困るね(家族の一員としての自覚)

助かるわー(役に立っている!自己有用感)

#### ほめるコツ

- ・できて当たり前のことをほめる。
- ・いつもできていることでも時々ほめる。

## 10代の子どもに接する10ヵ条

- 1 子どもを大人の力で変えようという思いは捨てて、肩の力を抜こう。
- 2 「どうして〇〇しないのか」という子どもへの不平不満を捨てよう。
- 3 今、現にある子どものよさ、子どもなりのがんばりを認めよう。
- 4 子どもへの、指示、命令、干渉をやめよう。
- 5 子どもから話をしてきたときは、忙しくてもしっかり聞こう。
- 6 子どもとの約束は守ろう。
- 7 子どもに本当に悪いことをしたときは、素直に謝ろう。
- 8 威嚇や暴言、体罰で子どもを動かそうという思いを捨てよう。
- 9 本当に心配なことは、きちんと向かい合って、しっかり注意しよう。
- 10 子どもになるべく「ありがとう」と言おう。

#### IV 今後に向けて

通常学級における授業実践においては、障害の有無にかかわらず、どの児童生徒においても、限られた時間の中で、目標に近づくように意欲を持続させて活動する様子が見られた。また、苦手なことや難しそうなことにおいても、「頑張ろう」という気持ちが表れていた。このことは何をどこまで学ぶかを明確にしたこと、特別支援教育の四つの視点（見通し、視覚化、焦点化、共有化）を取り入れたこと、実物の見本やパソコン動画などで提示したことなどの工夫を取り入れたことで通常学級における支援目標「自信をつけさせる」につながったものと思われる。しかしながら、得意な児童生徒がより一層興味を持ち、高度な課題に挑戦して達成感を得ることのできる「噛みごたえのある授業」を展開していくことが今後の課題である。

全校的な支援体制を構築するための啓発の在り方では、各校で行われている様々な事例を検証した。そこから、特別支援教育の理解を得るために、それぞれの学校が多様な手段や内容で取り組んでいることが分かった。しかしながら、その啓発についても、年間計画に位置付けられたものから、必要に迫られて行ったものまで多岐にわたっており、ニーズに合わせた資料や、教職員全体への理解がまだまだ不十分であることが分かった。

校内全体においてインクルーシブ教育システムを推進していくためには、通常学級での合理的配慮を意識した授業実践や、特別支援教育の理解のための研修を年間計画に位置付ける必要がある。さらに保護者のみならず地域への啓発も行っていく必要があると思われる。通常学級での授業実践や教職員・保護者・地域社会へと啓発を積み重ねていくことで、さらなるインクルーシブ教育システムの構築を推進していければと考える。